

和歌からみたコンテンツ・ツーリズムの枠組み — 歌枕の類型表現と旅の形成過程に注目して —

小野坂 知子

I 研究意図

土地のイメージを用いて物語が創作されたり、物語によって土地のイメージが認識されたりする。また、物語の舞台として取り上げられるようになったことで、土地の知名度が増し、観光地として価値を見いだされるようになる。観光誘致や特産物の売上増加など経済効果が生まれる。こうした物語の持っている旅行行動の触発に目をつけて、コンテンツ・ツーリズムが企画され、広く親しまれるようになってきた。観光案は全国民が、特に都市部の人たちが興味を持つように作られる事が多いため、地名から喚起されるイメージが多様化し、その中で特に適合したものが定着していく。このようなイメージの取捨選択は、一度も訪れたことのない人たち、もしくは創作のために土地について理解を得た大都市の人たちによって物語が創られ、強大な発信力で広められることにより、イメージが固定化され、そのイメージにそぐわないものは排除されていくこともある。

物語の創作においてイメージが利用された土地として、和歌の中で使われる地名である、歌枕というものが存在する。本来地名とは、固有名詞であり、「場を表示するもの」である。しかし、歌枕とは、歌に詠まれた地名を表すだけではなく、地名に複数の意味が付随されている。そしてその意味は、ある特定のイメージを喚起させることで、和歌という三十一音という短い表現の中で、物語を成立させているのである。また、歌枕を巡る旅が鎌倉期以降日本において行われている。旅行が日常的に行われることのない社会で、不便も多い中自らの意思でその地に赴こうとする人が現れたのは、歌枕が単なる地名以上の価値を持った特別なものであったからではないだろうか。

和歌に入れるだけでそのイメージが描写され、場所を表す以上の用途を持ち、その地名の場所を訪ねようと昔の人が旅に出るきっかけになっていたとすれば、歌枕は単なる地名としての意義を越えていたと考えられる。では、どのようにして歌枕は成立し、歌枕の土地はイメージを獲得していったのであろうか。また、イメージの獲

得過程において、どのようなことが検討されていたのだろうか。さらに旅を誘発するものとして歌枕が機能していたとすれば、土地のイメージとその土地を含む物語、伴って起こった旅はどのような関係を持っていたのであろうか。現代のコンテンツ・ツーリズムとはどのような相違があるのか。以上を今回の研究意図として、調査研究を行った。

II 先行研究

1. 歌の中にある地名表現

和歌の地名がどのように表現技法として成立し、歌枕となっていたのか。最初に和歌が文化的価値を持つに至った経緯を説明し、その後で歌枕がどのように類型表現として、特定の観念や独特の用法を獲得して成立したのかを述べる。

『古今和歌集』の仮名序・真名序(小沢・松田 1983)によれば、和歌は天地創成の昔からあったとされ、その明確な起源はわかっていないが、特に普及したのは奈良時代以降であるとされる。奈良時代には、柿本人麿や山部赤人などの優れた歌人たちと歌の本質をよく理解した天皇がおり、天皇はよい季節の折や美しい風景に出会ったときに、侍臣たちに和歌を献上させて才能ある臣下を見抜いていたようである。そして、この時代の人以前の歌を編集したものが『万葉集』であるという。しかし、平安京遷都の後、中国の影響を受けて漢詩文が隆盛するようになり、和歌は、内容が乏しく、その場限りの作ばかりになって、日常会話や色恋事のやりとりに使われるようになってしまい、衰退していった。こうした状況から、和歌の再興を試みた醍醐天皇の命により、紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑の四人の撰者によって編纂されたのが、『古今和歌集』(913年頃成立)である。『古今和歌集』に編纂された和歌は、『万葉集』に入らなかった古歌と撰者の和歌であり、大きく時代で分けると、読人知らずの時代、六歌仙の時代、撰者の時代という三つに分けられる。田中によれば、読人知らずの時代は、「万葉以降漢詩文が隆盛した九世紀前半頃」(田中 1985)まで、六歌仙の時代は、摂関政治を支えるために重要な役

割を担っていた後宮において、歌合や屏風歌が盛んになってきた九世紀後半頃、撰者の時代とは、古今和歌集の撰者を中心として和歌を文化的に高めようとした十世紀前半である。『古今和歌集』は宮廷社会に浸透し、創作されるようになってきた和歌を本来の文化的価値の高いものとして再興しようと試みたが、結果的には都人の教養書となり、貴族社会におけるさらなる和歌の浸透を促すこととなった。この後も、勅撰集の編纂は行われ、和歌は新しい時代様式を獲得していくことで文化的価値を高めていく。また、勅撰集の編纂が行われなくなった後も、文化として受け継がれ、現在の「現代短歌」まで続いている。(島津 1985)

さて、ここまでは和歌がどのような場面で詠まれ、どのような意図でまとめられることで文化的価値を得てきたのかを説明した。しかし、字数が限られている和歌の中で物語を伝えきするためには、一つ一つの言葉に複数の意味を持たせたり、その言葉によってイメージを喚起させたりすることが大切であり、文学的な技法の向上、和歌の本質を捉えた表現方法の確立が不可欠であったと思われる。そして、表現方法に対して一般的な理解が定着していることが必要とされたのである。こうした表現方法の中に歌枕は存在し、歌枕自体が類型表現として確立してきた過程がある。

片桐の研究によると、歌枕の成立過程は「(1) 特定の本歌などによって、歌に詠まれる自然的物事象が特定の人事的事象心象と結合しうることを、いわば通念として一般が認めることによって成り立ったもの。(2) その言葉が、本来の役割としては自然的物事を指し示すものであるにもかかわらず、人事的事象を表す別の語と音声的に共通するものがあることを誰もが認めることによって成り立ったもの。」の大きく二つに分類できる。(田中 1994)

また、歌枕表現と呼ばれる修辞技法は『古今和歌集』以降に成立したといわれる。つまり、『万葉集』に地名はあっても、表現を十分に備えた歌枕は存在しない。これは、『万葉集』の和歌に用いられた地名が、歌枕から連想され共有されるイメージよりも、地名という固有名詞が持つ現場表示の意味を強く持つからである。よって、『万葉集』の歌に詠み込まれた地名は、「歌枕表現」ではなく「地名表現」と表されてきた。地名が同音の語や特定の景物によって獲得し、共有された意味を伴って使われるようになったのは、『古今和歌集』の六歌仙の時代であり、この時代になると掛詞や縁語による修辞表現が増えるようになった。さらに、撰者の時代になると、和歌の中の地名は一般的な意味を伴って、定型化された用途を持つ

ようになる。その後は、歌枕として類型表現を伴った地名として、複雑なイメージを喚起させる言葉になっていったとされる。(山本 1994)

地名が類型表現を獲得し、歌枕となるには通念として一般的な理解が得られることが必要であり、勅撰集による選定が影響力を持っていたことが分かる。また、『古今和歌集』はこうした通念の形成において、最初に地名と通念を結びつけようとしたものであると推測できる。

2. 旅にまつわる物語

歌枕の類型表現の確立は、旅の形成過程にも影響を及ぼしている。現代人が当時の人々の旅行行動やそれに伴う記録を知り得るものとして紀行文があるが、日本古来の紀行文には必ず和歌が含まれている。今関は「和歌を含みぬ紀行はない。歌枕という、都を中心とした地方の美的感覚が成り立つ和歌の伝統と、旅の表現は切り離せない」と述べている(今関 2002)。つまり、旅をする上でも、旅を綴る上でも、和歌は切り離せないものであったのである。そして、これらの紀行文で詠まれた和歌が後の勅撰集に摂取されている。他の和歌で表現された土地を訪ねる旅が行われ、紀行文が書かれ、その紀行文の和歌が新しい類型表現としてまとめられて紹介される。そして、またそのまとめられた和歌の土地に行く旅が行われ、紀行文が創作される。和歌の中の地名は、勅撰集にまとめられることによって歌枕としての類型表現が成立していくから、紀行文の創作時期に著者が読んでいた勅撰集が新しくなるほど、その地名が持つ類型表現と喚起されるイメージは固定化、一般化されていったのではないかと思われる。

平安前期に書かれた『伊勢物語』や『土佐日記』は、平安京を中心とした律令政治が敷かれる中で、政治の中心地である都に定住するようになった貴族が地方に下った際に書かれた紀行文である。前者は個人的な理由から都を離れた男の逃避行・流浪の旅であり、後者は仕事のために地方赴任する男の道中の記録である。今関は『伊勢物語』の東下りがその後の勅撰集にどのように摂取されたかを考察し、「旅人の事情」と「流浪性」が古今和歌集には取り入れられていないと指摘した。『伊勢物語』における「旅人の事情」とは、都に身を置けなくなった男の状況であり、旅の動機である。そして「流浪性」とは、都に身を置けない訳であるから、帰る場所はなく、新たな居場所を探すために当てもなく旅を続けている男の現状を指す。だからこそ、旅に出ることに対するの楽しみよりも、都を離れることが寂しく、故郷である都に心が置かれている。男が『伊勢物語』の中で詠ん

だ秀逸な和歌は、古今和歌集に撰取されているが、帰京することもかなわない個人的な事情には言及がされておらず、都から遠く離れた所で都を思って詠むという状況が中心的なテーマとなっている。勅撰集の歌枕の付加的な意味は、都を中心として形成され、都人に受け入れられる解釈で形成された。類型表現は、単にどの和歌を選定するのかわけにとどまらず、その和歌に付随させるイメージの選定が行われた上で定着していったのである。

鎌倉期以降、個人の感性よりも伝統の枠組みを優先する日本独特の紀行の表現が生まれてくる。紀行文の作者は歌枕を巡り、現地で歌を詠むか、詠まなくても故事に言及する、というのが紀行文の類型表現となっていく。古今和歌集の撰者が歌枕表現を確立させようと試みたことを考えれば、歌枕としての意味を得た地名しか歌に用いられることはなくなる。旅をして紀行文を綴る人たちは必然的に歌枕を巡ることになり、歌枕には付随するイメージや感情があるために、旅の情趣までが決められた型にはめられて表現されるようになっていった。そのために、紀行文に綴られた土地と実際の風景が異なっている状況も起こるようになっていく。紀行文の中での旅の目的地の設定とルートの確立、そして紀行文の中の歌枕の類型表現は統一されていくから、その旅の型の形成に影響力を持っていたと考えられるのが、やはり旅に出る前に都人が教養として読んでいたとされる勅撰集であり、勅撰集が旅の形成にも関わっているといえるであろう。

では、勅撰集において、地名が類型表現を確立してきたとして、それは単に優れた言語表現（たとえば換喩）であったからなのであろうか。地名とは、そもそも場所を表すものである。なぜその土地が都人にとって物語を表現するのに適していたのか。また、表現として付随されたイメージには、土地が持つどのような要因が関係していたのか。日本最初の勅撰集である『古今和歌集』の地名を一つずつ抜き出し、調査した。

Ⅲ 調査研究

1. 古今和歌集の地名分布

1) 古今和歌集の地名の調査方法

勅撰集によって歌枕が類型表現を確立させていったとすれば、古今和歌集の地名には、当時の平安京の人々が和歌とその中の地名が持つイメージの連想から、撰者によってイメージの選定がなされ、複数の意味が付加された傾向が見られるはずである。そこで、小沢・松田(1983)『完訳 日本の古典 第九巻 古今和歌集』を用いて、古今和歌集の墨滅歌（古写本に書かれていながら墨で消して

あり、流布本では巻末にまとめられた）を含めた1111首の中から、地名が含まれている歌252首を分析した。

古今和歌集の和歌の地名は、全て歌枕表現として後世に受け継がれたわけではなく、しかも歌枕自体も景勝地として指定するために面積や範囲が明確に定められていたわけではない。現在まで受け継がれている主要な歌枕だけではなく、広範な地域を含む行政地名も含めて、歌に含まれる地名は何らかの意図のもとで歌に取り上げられていると考え、252首を調査対象とした。ただし、あくまで和歌の中で地名を表記することによって場所のイメージを示した歌のみを調査対象とし、但し書きで特定される地名については除いた。なお、本書を用いたのは、現代語訳が非常に分かりやすく、地名などの注釈が細かに記載されていたため、地名の判別がしやすかったこと、そして和歌の部分だけでなく、仮名序・真名序にも現代語訳を付けて説明されていたために、本調査が目的とする古今和歌集そのもの、そして撰者の意図についても考察をすることができたためである。

次に、調査項目として、歌の作者とその使用目的とした。使用方法は、「掛詞」「縁語」「連想」「状態」「状況」とした。それぞれについて、説明を加える。「掛詞」は同音の語を重ねることによって、複数の意味を加えている場合とした。例えば、「龍田山」が和歌の中に入り、「霞」や「波」が「たつた」と同音の言葉が重ねられている場合、「掛詞」として使われたと分類した。次に「縁語」についてであるが、イメージ形成と縁語の成立に明確な区分を加えることが出来なかった。そこで、「縁語」として和歌に解説が加えられた語は「縁語」として分類し、語が和歌に明記されているものについては「連想」に分類した。「連想」には、地名から別の語を連想したり、その土地の情景を連想したりすることで和歌に付加的な意味が加わった場合も含めた。「状態」は、その地名の場所の地形や川であればその流れなどの状態が、情景描写に用いられている場合とした。最後に「状況」は、現場表示の土地の固有名詞としての意味を用いるために使われた場合とした。この区分については、文学的な区分とは異なる点もあると思うが、あくまで作者がなぜその地名を使ったのかを考察するための一案として提示したい。

2) 古今和歌集の地名分布

古今和歌集に用いられた地名は93個ある。そのうち一番多いのは「吉野」の22首で、二番目に多い「龍田」の13首との差は大きい。また、逆に一首しか含まれていない地名は46個あり、用いられている地名の約半分は一度しか登場しない。

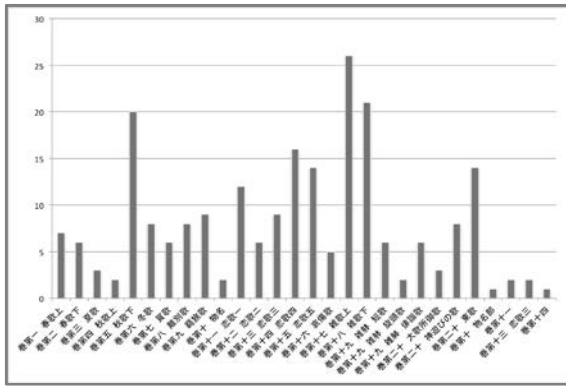


図1 巻ごとの地名の入った歌の数

(筆者作成)

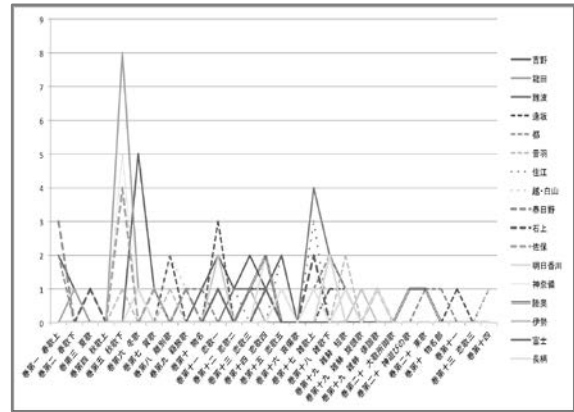


図3 巻ごとの頻出の地名の数の分布

(筆者作成)

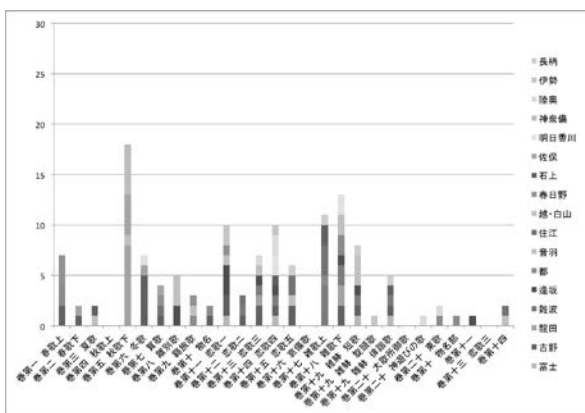


図2 巻ごとの頻出の地名の数

(筆者作成)

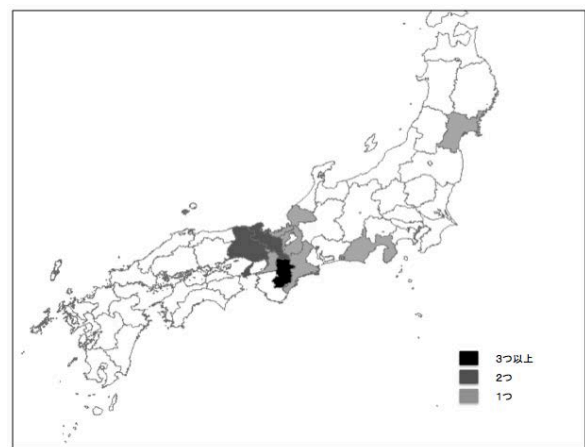


図4 頻出の地名の場所があるとされる都道府県

(ArcGISより筆者作成)

また、古今和歌集には二十巻と補足書きされた墨滅歌で章立てされ、ジャンル分けられている。巻ごとに地名の入った歌の数をグラフにまとめると、「巻第五秋歌下」と「巻第十七、十八雑歌上下」の項目が特に多いことが分かる。(図1) そのうち、4首以上に用いられている頻出の地名17個の含まれる歌の数を表にまとめ(表2)、グラフを作成すると(図2)、二点のことが考察できた。

まず、秋歌下の巻に含まれる地名は、そのほとんどが頻出の地名である。これは、春夏秋冬でカテゴリー化されたどの巻にも共通する特徴であり、地名が持つ季節感のイメージは固定されてきていたと考えられる。逆に、雑歌には頻出の地名が占める割合が少なくなっており、ジャンルを分けずに紹介された地名も多いことが分かる。東歌では、そのほとんどが、その巻のみで使用される地名となっており、都から離れた東国の歌では、共有されるイメージを利用して歌が創作されるような地名がまだ確立されていなかったのかもしれない。

次頻出の地名の巻ごとの数をグラフに示した。(図3)すると、「龍田」、「佐保」、「神奈備」は、「巻第五秋歌下」

に多く、「吉野」は「巻第六冬歌」に多く用いられていることが分かる。また、「難波」、「住江」は「巻十七雑歌上」に多く含まれている。これらは季節のイメージとしてジャンル分けされているのではないようである。

さて、頻出の地名17個のうち、13個は畿内に位置する(図4)。なぜ古今和歌集の歌に含まれる地名は畿内に多いのであろうか。時代背景から考察してみた。

3) 古今和歌集と都

飛鳥時代、奈良時代と政治の中心地が頻繁に移動している。律令政治の初期は宮だけを遷していたが、奈良時代ごろから京を作り、遷都を繰り返すようになった。こうした移動は、律令政治が確立していくなかで、政治や経済的に都の機能や規模を拡張する必要性があったからだけではない。権力闘争による兵乱や災害、伝染病などの生活不安が高まったこと、寺院勢力の政治関与が激しくなり政治に影響を及ぼしていたことなど、律令国家としての体制面での一新を試みたことが考えられる。しか

し、794年（延暦3年）に平安京に遷都されると、平家による福原京遷都、南北朝の混乱期を経たものの、東京遷都まで都は続くこととなる。都では天皇の後見である有力貴族の間で争いは起こったものの、天下を揺るがすような戦乱は起こらず、太平の世が続いた。「都人」は、単に都に住む人を指すだけでなく、現在の京都市にあったとされる平安京に住む人を指すこととなった。そして、都の定着は都以外の地域、すなわち地方の定着となった。しかし、都の移動は畿内で行われているため、遠方の地方都市との距離はそれほど変化しない。また、地方に関心が寄せられるほど、都の人たちがその土地の情景を思い描くことができるほどの情報や知識を得ているとも考えにくい。都が固定されたことで、都人が関心を寄せられる距離に位置し、古都で詠まれた歌に含まれる畿内における土地のイメージが固まってきたのではないか。古今和歌集の編纂は、「都の定着」だけでなく、「畿内における都の位置づけ」が定まってきたからこそその地理感覚と考えられるのではないだろうか。

2. 撰者のイメージ形成

次に古今和歌集の撰者が和歌の選定を通じて、地名から描写される場所のイメージとして適切なものを取捨選択した形跡について考えてみたい。まず、撰者が用いた地名について調査し、その後、地名が表す自然物に対して特定のイメージを付随させる地名について考察する。

1) 撰者の用いた地名

古今和歌集の中で一首しか用いられていない地名46個の中で撰者によって詠まれたのは5個、2首しか用いられていない地名17個の中では5個、3首用いられている地名13個の中で6個、4首以上用いられている地名では、「明日香川」と「都」以外全てに撰者によって詠まれている。頻出の地名に対して撰者が歌を詠んでいるということは、和歌を詠むにふさわしい土地であると認識していたからだと考えられる。

また、和歌に用いられる数が多い地名ほど、掛詞や縁語を引き出すためや土地の状態やイメージを連想させるためなど、複数の目的で地名が使われている。そして、その中でも、「吉野山」の雪や「龍田川」に流れる紅葉のイメージのように、使用される回数の多い目的がある。地名が複数の意味や物語性を持つようになり、その中でも使用の多い目的が存在することから、地名のイメージとしてふさわしいものが複数採られたということになる。

2) 自然物に対するイメージ

次に古今和歌集に多く用いられる地名が表す自然物として、山、川、海辺があげられる。

まず、山についてだが、山の地名が用いられる時は、山を覆っている木々の新緑や紅葉などをイメージさせるものが多い。紅葉しない木に覆われている「常盤山」や紅葉の美しさと一体感が喚起される「神奈備」などが、その例である。その中で、特定の使われ方をし、イメージの取捨選択がされたと思われる山があったので紹介する。

一つ目は、山とその燃えている状態を伴ってイメージさせた、「富士」である。「富士」を用いた和歌は5首あるが、その全てが「燃える」という状態を用いている。「富士」のイメージは燃えていることであり、現代人がイメージする高さや形ではなかったことは、驚きである。また、古今和歌集には伊勢物語から摂取された和歌が複数存在するにもかかわらず、富士の山を見て詠んだ「時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降らむ」という残雪に言及した和歌は外されている。今西は勅撰集に採られなかった理由について「地の文も歌も地名の説明に終わり、望郷の思い、旅の心情が述べられていないから」と旅の歌としての表現方法に言及したが、古今和歌集中の和歌とのイメージの違いも考えられるのではないだろうか。また、「富士」を含む和歌の中で、他のイメージを喚起させて詠んだ和歌が多数存在した可能性は否定できず、勅撰集としての和歌の選定において表現の統一だけでなく、イメージ統一の意図が働いた可能性も考えることができるのではないだろうか。

二つ目は、山と雪をイメージさせた、「吉野山」・「白山」についてである。

「白山」は現在の石川県白山市と岐阜県大野郡白川村にまたがる白山と見られている。使用目的としては別れや赴任地にいる状況から地名を出してきたと判断し、分類したが、6首中5首が雪のイメージを利用しており、そのうち、4首は雪という単語を伴って使用し、残り一首は雪を被った白山から白髪を連想させている。

「吉野山」では、12首中8首が雪をイメージさせており、さらにその全てが季節で分類された春歌と冬歌の章に分類されている。「吉野山」の雪は季節感を伴って紹介されていたと推測すれば、同じ山と雪の組み合わせでも、場所によってそのイメージが異なることがわかる。

これらは、自然物本来の持つ情景だけでなく、地名が特定されることでその地名が持つイメージや物語性が和歌の中に含まれている例である。

次に川についてだが、川の地名は同音の言葉を連想させて詠んだ歌が多い。例えば、「名取川」は当時噂の意味を持った「名」を連想させ、「明日香川」は「明日」を連想させた。流れの速さや水量の少なさに特徴を見だし

て歌のイメージを固めた地名もあるが、その特徴を複数人が用いた例は少ない。日々変わる川の水の流れが全く同じなことなど自然界ではありえないから、イメージを確立させるために、地名から連想を得ることを考えたのかもしれない。例外として、「龍田川」がある。この川の地名を用いた歌では、紅葉が流れる情景がイメージされ、それが錦や幣に例えられてもいる。「龍田」は秋の歌として詠まれた歌が多く、季節と情景というイメージが選択されたと考えられる。

山と川の両方の地形を含む地名もある。「龍田」や「音羽」がその例であり、山と川が連想させる情景はほぼ一致している。ただ、「吉野」のように山のときは雪を連想させ、川のは流れの速い状態をイメージさせるものもあり、同一地名の山と川のイメージの相違については研究の余地がありそうである。

続いて、海辺についてだが、大きく二種類に分けられる。一つは、「住江」のように海辺の自然の景勝にイメージを得るもので、もう一つは、「伊勢」や「須磨」、「塩竈」など海辺で暮らす人々の生活からイメージを得るものである。当時の人々が、景勝地としての海辺と港としての海辺の両方で認識していたことが分かる。後者の中には、漁師の着物の目にまでイメージを膨らませたものもあり、イメージ形成が自然物でなくても成立していたことが分かる。

さらに、山や川の名前など、地形のデータを含んでいない国名などの地名は、本来の目的である現場表示の意味で和歌に用いられていることが多い。また、他の地名の説明に用いられることが多く、特に「陸奥」は必ず他の地名を伴って用いられている。都人に地方の名所を紹介するためには、和歌の中であっても行政地名を伴って説明することが必要であった、もしくは、国についての情報や知識で共有しうるものがあり、国名を入れることである程度固まったイメージを連想させることができたのかもしれない。しかし、「甲斐」や「駿河」は都人によって、掛詞として使用されている。情景の固定されていない場所に対して、少しでも複数の意味を込めようとしていたとも考えられる。

IV 考察

1. コンテンツ・ツーリズム研究と歌枕

近年、コンテンツ・ツーリズム研究が観光学を中心に行われている。コンテンツ・ツーリズム学会によれば、「コンテンツ・ツーリズムとは、地域に「コンテンツを通じて醸成された地域固有のイメージ」としての「物語性」「テーマ性」を付加し、その物語性を観光資源とし

て活用することである」(コンテンツ・ツーリズム学会HPより)。映画やアニメなどをきっかけに旅をすることが人気であるが、物語の創造という文化的な行動をする人々(作り手)、その物語を通じて旅行という実践的な行動をする人々(受け手)、コンテンツ・ツーリズムに関わるそれぞれに社会的背景が存在する。まず、メディアコンテンツが大量消費されるようになったために、作り手も大量に物語を生産する必要性が出てきた。一から物語の世界を作り出すよりも、物語の舞台を決めることでその土地のイメージを使ったほうが、受け手の作品への理解を早めることができ、創作労力を低減化できる。また、アニメーションなどの背景にも実際の写真や地図を参考にできるが、これらのデータを入手するためにかかる時間は、技術発展により短縮化されている。次に受け手についてだが、情報技術の発達によって、舞台になった場所の名前が分かれば、簡単にその土地の情報を得ることが出来るようになった。また、それにつれて個人の探索能力や旅行計画能力、実行可能性が飛躍的に上がり、交通網の整備も進んだことから、現地を訪ねることも容易になった。また、それぞれが現地を訪ねた後、SNS等を使えば、世界中に情報を発信することもでき、受け手の能力の向上は、コンテンツ・ツーリズムの隆盛に大いに影響しているであろう。現代社会は、コンテンツという何らかの形の物語が土地をそのイメージ形成に用いることも、それによって紹介された土地を訪ねることも容易になったといえる。

岡本の研究では、コンテンツ・ツーリズムを経験的に行うとき、観光行動に果たす主体の役割によって大きくツーリスト(旅行者)、地域住民、コンテンツプロデューサー、観光プロデューサーの四つに着目している(岡本2012)。ツーリスト(旅行者)とは、前述の受け手にあたり、コンテンツからイメージを膨らませた土地を実際に訪ねる人である。地域住民とはそのコンテンツが創作された土地に住む人々であり、必ずしもコンテンツによるイメージが共有されているとは限らない。また、コンテンツプロデューサーとは、先ほどの作り手にあたるが、単なる物語の創作者だけでなく、その流通や販売にも研究が及ぶ。最後に観光プロデューサーについてだが、旅行に関わる全ての人や組織を含み、観光効果を狙って観光誘致や利便性向上に力を入れるようになった地方自治体も含まれる。

こうして考えると、コンテンツ・ツーリズムは情報や技術が発達した現代になって行われるようになった行動であるように思われる。しかし、人々が物語によって土地のイメージを得て、現地を訪ねてイメージを喚起し、

そしてまた土地のイメージが形成されたり、確立されたりするという土地のイメージ形成については、歌枕による土地のイメージ形成過程と類似しており、コンテンツ・ツーリズム研究においても、歌枕とそれを巡る旅はコンテンツ・ツーリズムとして位置づけられている。

増淵は「コンテンツ・ツーリズムは今に始まったことではない。(中略)大和朝廷以来親しまれてきた大和・山城の地名のほか、特に崇敬される神仏に縁の場所、歴史的な事件のあった場所、語呂合わせにより連想を誘う場所などがある。また本歌取りが行われるようになると、古歌に詠まれていた地名も歌枕としてしばしば使われるようになった。」(増淵 2010)と述べ、日本におけるコンテンツ・ツーリズムの始まりを、和歌というコンテンツに詠まれた「歌枕」を巡る旅まで遡って考えた。また、岡本は「歌枕を媒介にして、地域のイメージが詠み手と読み手で共有され、そのイメージを確かめようと、旅に出る人々が現れる。そうして旅人が歌を詠むことで、一つの歌枕が持つ意味やイメージはどんどん多重化されてい」(岡本 2016) ったとし、コンテンツ・ツーリズムが土地のイメージ形成に影響していたことにも言及している。情報や技術の発達していなかった社会においても、コンテンツ・ツーリズムは成立し、人々は旅と物語と土地の全てを包括して味わうことのできるイメージをそれぞれが影響し合いながら形成してきたことが分かる。

しかし、歌枕が、コンテンツ・ツーリズムにおけるコンテンツ(=物語)の一つと位置づけられるとすると、いくつか疑問が生じる。コンテンツ・ツーリズムの研究枠組みに位置づけられるような役割を担っていた人はいるのか。そして、人々がコンテンツ・ツーリズムをすることで土地のイメージ形成ができたのはなぜかということである。

2. コンテンツ・ツーリズムにおける歌枕の調査対象

和歌がコンテンツであるといえるなら、歌枕を巡るコンテンツ・ツーリズムにはどのような人々が研究対象となるのであろうか。岡本が分類したコンテンツ・ツーリズム研究の枠組みをもとに、それぞれの役割が該当するものを考え、図を作成した。(図5)

まず、旅行者を研究対象とする場合、現代であれば、入国や交通の利用を数値化することが出来るが、現地に足を運ぶことだけを観光における旅行者と捉えるなら、極めて数は限られてくるし、当時旅行者を統計的に調べたデータはないため、その全体数は辿りようがない。また、歌集に含まれている旅の和歌を調査対象にすると、

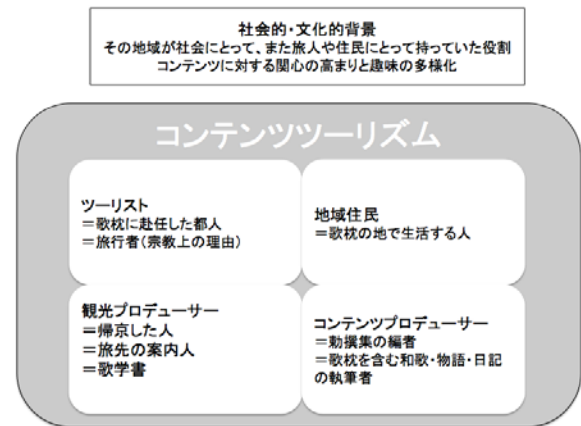


図5 歌枕のコンテンツ・ツーリズムの研究対象

(岡本健 2011 「図-2 コンテンツツーリズムの研究枠組み」を参考に筆者作成)

現地で詠んだことが補足に記載されているものもあるが、作者が旅行者かどうか、どのような旅の目的を持っていたかなどを明確に全て判断することはできないであろう。旅行者を一般化するよりも、特定の旅行者に目を向けて、紀行や日記の記述やその中に含まれる歌枕の表現方法を一つ一つ分析していくことが適しているのではないだろうか。その場合、個人の記録としての地方赴任をする官吏の日記、紀行文が調査対象となるであろう。しかしながら、これまでにも述べてきた通り、紀行文は定型的な表現方法によって成り立っているため、事実を厳密に記したものではないことを考慮する必要がある。また、土地に対するイメージを抱いて旅をしていたのであれば、それが紀行文やその中の和歌に影響しているため、作者が紀行文を書いた時代にその歌枕がどのような類型表現を固めてきていたのかを考える必要がある。

次に、地域住民を調査対象とする場合を考える。都では歌枕のイメージは定着されてきたとはいえ、地方で共通の認識が得られていたかは不明である。都のみで歌枕のイメージが形成されて、そこに地元住民は関わっていなかったのかもしれない。また、土地の生活を定着させているとはいえ、彼らの生活も変化するから、イメージには完全に一致している訳ではない。歌枕が成立して、土地のイメージが定着されても、そのイメージに沿った生活をするを強制することはできないからである。伊勢の海では漁師が生活しており、塩竈では塩を作っていることは年貢を治めるための行動であり、それを文化的に残そうとして生活を合わせている訳ではないだろう。地域住民にとって文化的に価値のあるものと都人にとって文化的価値があると考えられていたものの違いがあり、歌枕のイメージと実際の生活や風景を比較できるとすれ

ば、その相違が見えてくるのではないだろうか。

三つ目にコンテンツプロデューサーについてだが、この役割を果たすのが勅撰集の撰者なのではないだろうか。これまで述べてきたことだが、勅撰集が観光価値に関して地名に対して持つ意義は、掛詞などの技法の確立だけではない。律令政治がしかれた生活の中で共有されてきた地名や万葉集で人々に浸透したイメージなど、ある地名に対して多様化されたイメージを絞り込むことである。その地名はどの局面で詠まれるのが適切か(四季・羈旅歌など)を示している。そして、歌枕のイメージの絞り込みが旅の形成過程に影響しているのである。古今和歌集においては、平安京の都人が撰者であることから、その歴史的な背景や情趣を感じる地形的な要因をもとに、イメージ形成を図った地名は選抜されていた。和歌に文化的価値を与えるために表現の選定が行われ、それと共に歌枕の選定も行われていたのである。さらに、こうしたイメージにより物語性を持たせたのが、歌枕を含む物語や日記の存在であろう。これらの執筆者もコンテンツプロデューサーとして位置づけられるのではないだろうか。

最後に、観光プロデューサーについてだが、帰京した人によってもたらされる知識や旅先の案内人の存在などは、日記などに記述が見られるものの、観光といえる行動文化が形成されていたかどうかは検討しなければならない。しかし、和歌の創作のために歌学書が作られ、読まれるようになったことを考えると、歌枕の土地について情報を集め、知識を得ていたが、旅する機会に恵まなかった人々はおろ、行動を起こさずとも和歌を味わうことで旅した気分で作成を行う者は、平安時代多く存在していたのではないだろうか。旅行者がどのように土地の知識を得ていたのかだけでなく、今後旅行者になりうる存在として都人がどのように歌枕の土地の知識を得ていたのかを考えられるとすれば、歌学書は観光プロデューサーを研究するための調査対象としうるだろう。

3. フレームワークの提案

歌枕の類型表現と旅の形成過程を『古今和歌集』の撰者というコンテンツプロデューサーの役割から再考した際に、コンテンツ・ツーリズムの形成期において、旅の創作と物語の創作は変化していることに気づいた。コンテンツに用いられた歌枕がどのイメージ形成過程にあるかで、旅に違いが生じる段階図を作成した(図6)。以下に、この段階図を説明する。

まず、奈良時代に和歌が普及するにつれて、和歌の中に地名が含まれるようになる。それらの地名はさまざま

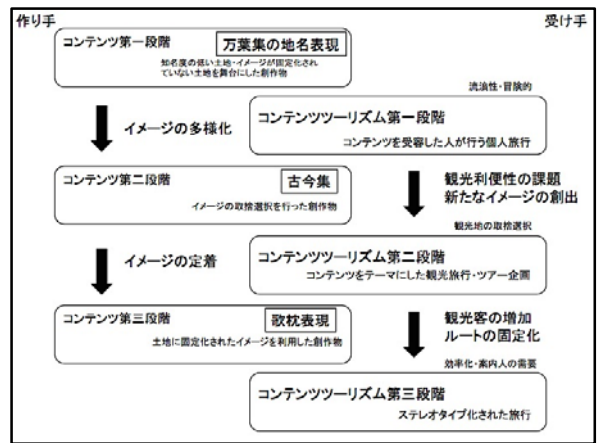


図6 コンテンツとコンテンツ・ツーリズムの段階 (筆者作成)

に和歌の中でイメージを付加されるようになった。全国的を統一的に治める律令政治が始まったばかりで、和歌によって初めて地名を知る人もいたであろう。これらを「コンテンツ第一段階」とする。この時代から平安初期までは、イメージ形成が図られて和歌などにより、地名だけは知っているが今ひとつイメージの固まっていないところへ、年貢を納めるため、九州に防人として赴任するため、都の官吏が地方赴任するためなど、制度的に旅に出ることもあった。しかし、京都に居心地悪さを感じて流浪の旅に出かけた伊勢物語のように冒険的に旅に出る人々も現れている。これらの旅では、コンテンツによって土地のイメージは固定されていないから、彼らが現地で詠む歌には地名使用の定型がない。これらを「コンテンツ・ツーリズム第一段階」とする。

次に、様々な土地で和歌が詠まれ、様々な思いをのせて旅の歌が詠まれるなかで、歌の創作において統一感をもたらし、イメージの取捨選択を行ったのが勅撰集の時代である。本来は、名歌の収集が目的であったが、表現方法の確立のために土地のイメージが取捨選択され、和歌に入れる情趣を感じられる言葉やイメージの選定が土地に合う形で検討されたことは、古今和歌集の撰者の調査研究により分かった。よってこれらを「コンテンツ第二段階」とする。そして、勅撰集によって紹介された地名や土地のイメージはその後の和歌に一般的に使われるようになり、名所としての価値が高まってきた。また、そのイメージに合った季節や理由で訪ねられるようになっていく。彼らは先人たちと自分の状況を類似させることで、そしてその地に身を置くことで、物語と自分を重ねていたのかもしれない。これを「コンテンツ・ツーリズム第二段階」とする。

院政期(11世紀後半~12世紀末)に歌学が盛んに研究

されるようになり、歌学書や名所歌集が作られるようになった。これらは、当時の人々にとって和歌を親しむための教科書や参考書のような存在であり、歌枕についても注釈が加えられ、名所として固定化されるようになっていったと考えられる。このような過程で地名が類型表現として定着し、歌枕として和歌の中に用いられるようになると、歌枕として持つ意味が他のどんな表現にも勝ってその土地を引き立てるものとして文化的価値を得ていく。どんなに素晴らしい内容や描写を含んでいても、用いられた歌枕のイメージが異なれば、その付加的意味を得ることはできない。ある土地において作られたイメージが、他のイメージよりも圧倒的な価値をもつようになると、そのイメージを利用した創作が生まれるようになる。これを「コンテンツ第三段階」とする。この段階になると、旅をしてもそのイメージに沿わない限り、旅として文化的価値を持つことは出来ない。よって、旅する人もイメージに沿ったものしか、旅の記録として残せなくなる。こうして、紀行文に型が形成されていく。これを「コンテンツ・ツーリズム第三段階」とする。

そしてこれらコンテンツによる土地のイメージの確立と旅行行動のパターン化は現代のコンテンツ・ツーリズムにおいてもいえる。そもそも、単にその土地を舞台にしたからといって、人々が行動を起こすとは限らない。しかし、知名度が低くてもある物語の舞台となり、共感した人が現地を訪ねるかもしれない（コンテンツ第一段階）。こうした旅行者は現地に行って、その舞台を探すことに興味を持つ。現地の方はこうした観光客が来ることがまだ予測できていないために、受け入れ態勢は整っていない（コンテンツ・ツーリズム第一段階）。しかし、そうしてコンテンツによって土地のイメージが多様化されるなかで、特に人々に受け入れられるイメージが出てくる（コンテンツ第二段階）。このときには、そうしたコンテンツによるイメージが観光業に関わる人々に認識されるようになる。旅行者は、一から探すのではなく、パンフレットや地図を参考にしながら、モデルルートを辿ることができる（コンテンツ・ツーリズム第二段階）。観光客が増加し、社会にイメージが定着すると、そのイメージを利用してコンテンツが作られるようになる。舞台をその土地にすることで、もしくはその地名を出すことによってイメージの形成が容易になるのである（コンテンツ第三段階）。こうしたコンテンツでは、その土地の特定の場所を訪ねるのではなく、その土地のイメージを確認することが目的となる。イメージの固定に伴い、旅行ルートも固定化され、ツアーやガイドも設けられるようになる。旅行者はルートに従うことが効率よくその土地を

楽しむことができる手段と考えるため、その場所を自分で探す気などないし、その場所以外の発見を得ることは旅の楽しみに含まれていない（コンテンツ・ツーリズム第三段階）。これら旅行行動の違いは、単に旅行者の個性だけでなく、これらの旅行行動を起こすためのコンテンツに原因がある。コンテンツから得た土地に対するイメージに違いがあればこそ、旅行行動はその形態を変えるのである。

しかしながら、近年の旅行者はコンテンツから得た土地のイメージの新規さだけで旅行している訳ではない。旅行ガイドブックやインターネットなどからも、短期間に大量の情報が得ることができるのである。本来ならば段階を経て、コンテンツ・ツーリズムの型は定着されていくが、情報が大量に提供され、簡単に入手できる現代においては、簡単に前段階のコンテンツやコンテンツ・ツーリズムについて調べることができ、旅行者はそれらを旅の型として検討することができる。また、紀行文の制作のように、文化的行動として旅を位置づけているわけではないから、コンテンツ・ツーリズムを主軸として、異質なものを含んでもとがめられることはない。コンテンツに含まれていないイメージを旅に含むことも、可能なのである。

V おわりに

歌枕が類型表現として定着する過程には、土地のイメージの取捨選択が行われており、それが旅行行動に影響を与えていたことを述べてきた。また、土地のイメージを確定させるために、勅撰集が機能しており、特に古今和歌集においてのイメージの取捨選択には、表現方法の統一だけでなく、土地との適合性も検討されていたことが分かった。さらに歌枕を用いた和歌がコンテンツであるとすれば、歌枕を巡る旅はコンテンツ・ツーリズムとなり、研究対象とすべき文献や人についても検討し、研究の余地があることが分かった。そして、コンテンツとコンテンツ・ツーリズムが段階的に与える影響についてフレームワークを提案し、それぞれの段階において土地のイメージは変化し、段階を増すごとに固定化することを述べてきた。

古代の旅の紀行文や和歌に触れることで、「行ったことのない場所に安心して出かけられること」という現代日本では当たり前なのが情報社会のもたらした産物であると気づいた。現代の旅行行動の基盤には、情報の蓄積によって得た知識があり、昔の人が旅に出る際に抱いていた恐怖感や悲壮感はこれにより払拭されてきている。また、最近ではスマートフォンの普及により、現地でも

情報を得やすくなっている。これ以上に旅にとって成熟した段階はないだろう。しかしながら、日本国内どこでも旅の利便性が高い水準で提供されているわけではないし、観光地を生活の場とする人々も訪問者の増加に対応しきれていない。旅や物語の創造において環境は整えられてきたが、肝心の舞台となる土地がコンテンツに対応していないのである。土地はイメージと現実の両方を持つから、それぞれが共存できる方法の模索が今後も行われていくだろう。

また、他人に旅先で体験した土地を伝えるのに写真や動画を使ってしまう現代人からすれば、地名だけで物語性を喚起できるようなイメージ形成ができる言語能力と土地への強い思い入れを持ち合わせていたことは改めて感心すべきことであった。また、地名を、場所を表示するための固有名詞としてで用いるだけではなく、そこに複数の意味や物語を凝縮させようとした背景には、言葉へのこだわりだけでなく、土地への愛着も垣間見える気がする。観光に大切な土地のイメージ形成を支えているのは、文化的働きだと感じた。

今後の研究課題としては、フレームワークと調査対象の厳密な検討がある。今回の研究では、主に文献解読的な考察を行い、現実の観光行動との関係は検討できなかった。コンテンツ・ツーリズムから歌枕を考える研究が蓄積されて、実証されることを期待する。

謝辞 本稿を作成するにあたりましては、指導教員の水野勲先生、地理学コースの先生方に終始丁寧なご指導を頂きました。また、ゼミの皆様にも議論に参加していただき、たくさんの助言を頂きました。心より感謝申し上げます。

文献

- 今関敏子 2002. 造型される“旅”—東下りと勅撰集—. 川村女子大学研究紀要 13(2), 179-196
- 岡本 健 2012. コンテンツツーリズム研究の枠組みと可能性. 山村高淑・岡本 健編『CATS叢書 Vol.7 観光資源としてのコンテンツを考える 情報社会における旅行行動の諸相から』北海道大学観光学高等研究センター, 11-40.
- 岡本 健 2016. 現代の「歌枕」-アニメ聖地巡礼. まほら(旅の文化研究所) 87 歌枕, 20-21.
- 小沢正夫, 松田成穂 1983. 『完訳 日本の古典 第九巻 古今和歌集』小学館.
- 島津忠夫 1985. 和歌から短歌へ. 神野志隆光編『和歌史: 万葉から現代短歌まで』和泉書院, 1-6.
- 田中 登 1985. 三代集の世界. 神野志隆光編 1985. 『和歌史: 万葉から現代短歌まで』和泉書院, 62-84.
- 田中 登 1994. 古今集歌人の歌枕表現. 片桐洋一編『歌枕を学ぶ人のために』世界思想社, 36-49.
- 増淵敏行 2010. 『物語を旅するひとびと コンテンツ・ツーリズムとは何か』彩流社.
- 山本登朗 1994. 万葉集の地名表現 歌枕前史. 片桐洋一編『歌枕を学ぶ人のために』世界思想社, 21-35.
- コンテンツツーリズム学会HP
<http://contentstourism.com/seturitushi.html> (最終閲覧日: 2016年12月20日)

おのさか・ともこ (65期卒)
独立行政法人中小企業基盤整備機構

Contents Tourism in Relation to *Waka* Poems: Focusing on the Stereotyped Depiction of *Utamakura* and the Process of Travel Decision-making

ONOSAKA, Tomoko (Organization for Small & Medium Enterprises and Regional Innovation)